

ものごととは

鈴木孝夫
すずきたかお

考えてみると、私たちはなんとまあ数え切れないほどたくさんもの、に囲まれて生活していることか。

私が今向かっている机の上には、電気スタンド、タイプライター、灰皿、本、手紙、原稿用紙、ボールペン、消しゴム、ライター、鉛筆などが雑然と散らかっている。

引き出しを開ければ、ここには細かい文房具、画鋏がびょう、鋏はさみ、鍵、ホチキス、ナイフ、名刺の束など何十種類もの品物が、ぎっしりだ。

私が身につけているものだけでも、洋服、セーター、ネクタイ、ワイシャツ、靴下に始まって、眼鏡、腕時計、バンドなど、十指ではとうてい数え切れない。

この調子で、人間が作り出し、利用している製品の種類を考えると、見当もつかないほどの多岐にわたっていることがわかる。

また自然界には、何万という鳥類や動物の種類がある。昆虫は何十萬種とも言われる

し、そのうえ膨大な数の植物がある。そしてこれらはすべて固有の名称を持っているのだ。

名前がついているのは、ものだけではない。物体の動き、人間の動作に始まって、心の動きなどという、微妙なことにも、いちいちそれを表すことばがある。事物の性質にも、いや事物と事物の關係にさえ、それを表す適切なことばが対応しているのだ。

こんな調子で、世界には、はたして何種類のもの（事物や対象）や、こと（動き、性質、關係など）が存在するのだろうかと考えてみると、気が遠くなるほどである。

しかもものやことの数、そしてそれに対応することばの数は、今述べたような事物や性質の数の、単なる総和にとどまらない。

たとえば自動車という一種類のものがある。ところがこれは、約二万個の部品からできている。それにいちいち名がついているのはもちろんである。ジェット機になれば、部品の数は一ケタ上がるといふ。さらに面倒なことに、これらの部品の一つ一つは、当然のことながら、いろいろな物質から成る材料からできていて、それも全部名前があるという具合に、どんどん細かくなっていく。

こんなふうにも、ものことばは、互いに対応しながら人間を、その細かい網目の中に押し込んでいる。名のないものはない。「森羅万象には、すべてそれを表すことばがあ

る。」これが私たちの素朴な、そして確たる実感であろう。

この、ものがあれば必ずそれを呼ぶ名としてのことばがあるという考えと、同じくらしい疑いのないこととして、多くの人は、「同じものが、国が違い言語が異なれば、全く違ったことばで呼ばれる。」という認識を持っている。犬という動物は、日本語では「イヌ」で、中国語では「狗」、英語で dog、フランス語で chien、ドイツ語では Hund、ロシア語で собака、トルコ語で köpek といった具合に、さまざまな形のことばで呼ばれる。

私たちが学校で外国語を勉強するときや、辞書を引いて、日本語のあることばは、外国語では何と言うのかを調べるときは、この同じものが、言語が違えば別のことばで呼ばれるという、一種の信念とでも言うべき、大前提をふまえているのである。

ところが、ことばとものの関係を、詳しく専門的に扱う必要のある哲学者や言語学者の中には、このような前提について疑いを持っている人たちがいる。私も言語学の立場から、いろいろなことばと事物の関係を調べ、また同一の対象がさまざまな言語で、異なった名称を持つという問題にも取り組んできた結果、今では次のように考えている。

それは、もの、という存在がまずあって、それにあたかもレッテルを貼るような具合に、ことばがつけられるのではなく、ことばが逆にものをあらしめているという見方である。

また言語が違えば、同一のものが、異なった名で呼ばれると言われるが、名称の違いは、単なるレッテルの相違にすぎないのではなく、異なった名称は、程度の差こそあれ、かなり違ったものを、私たちに提示していると考えるべきだといふのである。

この第一の問題は、哲学では唯名論¹と実念論²の対立として、古くから議論されてきているものである。私は純粹に言語学の立場から、唯名論的な考え方が、言語といふもの³のしくみを正しく捉えているようだということを述べてみようといふわけである。

私の立場を、一口で言えば、「初めにことばありき」ということに尽きる。

もちろん初めにことばがあるといつても、あたりが空々漠々としていた世界の初めに、ことばだけが、ごろごろしていたという意味ではない。またことばがものをあらしめるといつても、ことばがいろいろな事物を、まるで鶏が卵を生むように作り出すということでもない。ことばがものをあらしめるということは、世界の断片を、私たちが、ものとか性質として認識できるのは、ことばによつてであり、ことばがなければ、犬も猫も区別できないはずだといふのである。

ことばが、このように、私たちの世界認識の手がかりであり、唯一の窓口であるならば、ことばの構造やしきみが違えば、認識される対象も当然ある程度変化せざるを得ない。

15

10

5

1 唯名論 ここでは、ことばによつて世界は分けられ、認知されるのだという立場をさす。

2 実念論 ここでは、ものは認識に先立つて存在することを認める立場をさす。

3 初めにことばありき 『新約聖書』ヨハネ伝福音書、第一章の冒頭「太初に言あり、言は神とともにあり、言は神なりき。」から来た言葉。

なぜならば、ことばは、私たちが素材としての世界を整理して把握するときに、どの部分、どの性質に認識の焦点を置くべきかを決定する仕掛けにほかならないからである。今、ことばは人間が世界を認識する窓口だという比喻を使ったが、その窓の大きさ、形、そして窓ガラスの色、屈折率などが違えば、見える世界の範囲、性質が違ってくるのは当然である。そこにもものがあつても、それをさす適当なことばがない場合、そのものが目に入らないことすらあるのだ。

抽象的な議論はこのくらいにして、具体的なことばの事実から考えていくことにしよう。まず身近にあるもの、の例として机のことを考えてみる。机とはいったい何だろうか。机はどう定義したらよいのだろうか。

机には木でできたのも、鉄のものもある。夏の庭ではガラス製の机も見かけるし、公園には、コンクリートのものでさえある。脚の数もまちまちだ。だいたい私が今使っている机には脚がない。壁に板がはめ込んであつて、造りつけになっている。また一本脚の机があるかと思えば、会議用の机のように何本もあるのも見かける。形も、四角、円形は普通だし、部屋の隅で花瓶などを置く三角のものもある。高さは日本間で座って使う低いものから、椅子用の高いものまでいろいろと違う。

こう考えてみると、机を形態、素材、色彩、大きさ、脚の有無および数といった外見

的具体的な特徴から定義することは、ほとんど不可能であることがわかってくる。

そこで机とは何かと言え、「人がその上で何かをするために利用できる平面を確保してくれるもの」とでも言うほかはあるまい。ただ生活の必要上、常時そのような平面を、特定の場所で確保する必要と、商品として製作するためのいろいろな制限が、ある特定の時代の、特定の国における机を、ほぼある一定の範囲での形や大きさ、材質などに決定しているにすぎない。

だが、人がその上で何かをする平面はすべて机かと言え、必ずしもそうでない。たとえば柵は、今述べた机とほぼ同じ定義が当てはまる。家の床も、その上で人が何かをするという意味では同じである。そこで机を、柵や床から区別するために、「その前度人がある程度の時間、座るか立ち止まるかして、その上で何かをする、床と離れている平面」とでも言わなければならない。

注意してほしいことは、この長たらしい定義のうちで、人間側の要素、つまり、そこにあるものに対する利用目的とか、人との相対的位置といった条件が大切なのであって、そこに素材として、人間の外側に存在するものの持つ多くの性質は、机ということばで表されるものを決定する要因にはなっていないということである。

人間の視点を離れて、たとえば室内に飼われている猿や犬の目から見れば、ある種の

棚と、机と、椅子の区別は理解できないだろう。机というものをあらしめているのは、全く人間に特有な観点であり、そこに机というものがあのように私たちが思うのは、ことばの力によるのである。

このようにことばというものは、渾沌こんとんとした、連続的で切れ目のない素材の世界に、人間の見地から、人間にとって有意義と思われるしかたで、虚構の分節を与え、そして分類するはたらきを担っている。言語とはたえず生成し、常に流動している世界を、あたたかも整然と区分された、ものやことの集合であるかのような姿の下に、人間に提示してみせる虚構性を本質的に持っているのである。

5



鈴木孝夫

一九二六年（大正一五）―。言語学者。東京都生まれ。

日本語の語彙（とくに代名詞）を他の言語と比較検討し、日本語の特質を日本人の行動様式や社会構造とも関連させて論証して、高い評価を受ける。

【主な著書】『閉とどめられた言語・日本語の世界』『ことばの社会学』など。

【出典】『ことばと文化』によった。



ことばは単なる意思疎通の道具ではなく、「文化」であることを豊富な事例をあげて論証。

新出漢字

- 鈴(振鈴) 稿(草稿) 鉛(鉛色) 鍵(鍵盤) 刺(刺激) 岐(分岐) 昆(昆布) 膨(膨張) 称(敬称) 網(網膜)
- 扱(扱い) 貼(貼付) 粹(生粹) 漢(漠然) 把(把持) 握(握力) 焦(焦土) 抽(抽出) 瓶(土瓶) 椅(椅子)
- 彩(彩色) 徴(徴用) 虚(空虚)

学習

- 一 筆者によれば、ものとことばの関係は一般的にはどのような考えられているのか、まとめてみよう。
- 二 次の文で筆者はどういうことを言おうとしているのか、説明してみよう。
- 1 ことばが逆にものをあらしめている(五・16)
 - 2 異なった名称は、程度の差こそあれ、かなり違ったもの、私たちに提示している(五・2)
- 三 机の具体例を通して筆者は何が言いたかったのか、まとめてみよう。
- 四 言語が「虚構性を本質的に持っている」(五・8)とはどういうことか、考えてみよう。

言葉と表現

- 一 次の語の意味を調べてみよう。
- 1 森羅万象(四・8)
 - 2 空々漠々(五・8)
- 二 この文章の論述のしかたの特徴について、考えてみよう。